

乳幼児を持つ親に対する子育て観尺度の開発

－信頼性・妥当性の検討－

陳 東 (千葉大学看護学部)
森 恵 美 (千葉大学看護学部)
望 月 良 美 (慶応義塾大学看護医療学部)
柏 原 英 子 (千葉大学看護学部)
安 藤 み か (元千葉大学看護学部)
大 月 恵理子 (千葉大学看護学部)

本研究の目的は、乳幼児を持つ親の子育て観を測定する尺度（子育て観尺度）を開発し、その信頼性・妥当性を検討することである。子育て観を「乳幼児を育てること全般に対する個人の見解、考え方、価値観、認識、印象、期待の総体である」と定義し、その下位概念を「親役割観」、「子ども観」、「子育て像」、「周囲との関わり」の4つの側面から捉えることとする。尺度の開発は、①文献による構成概念の検討と尺度原案の作成、②内容的妥当性と表面的妥当性の検討・修正、③質問紙調査による信頼性・妥当性の検討、という①～③の手続きを経て行った。調査に用いた尺度の試作版は、65質問項目であった。調査対象は、対象者の基準を満たす親（父親と母親）700組であった。質問紙の回収数は492名（母親296名、父親196名）であり回収率は35.2%であった。そのうち全質問項目に回答があった416名（母親252名、父親164名）を分析対象とした。回答の偏り、クロンバック α 係数、I-T相関、因子分析の結果に基づき、合計22項目を削除し、43項目を採用し、5下位尺度となった。再構成された尺度は、クロンバック α 係数が0.79であり（0.58～0.81）、内的整合性が一定のレベルに達している。また、因子分析により5因子が抽出され、各下位尺度を構成する質問項目は同一因子に0.30以上の最も高い因子負荷量を有し、尺度は構成概念妥当性を確保していることが確認された。

KEY WORDS : parents, childrearing value scale, development

I. 緒 言

子育ては文化に影響を受けるが、少子化が進んでいる日本社会においては、血縁や地縁による子育て伝承の脆弱化が指摘され、子育てをしている母親が孤立しストレスフルな状況に陥ることが多いと思われる。育児ストレスを抱え、育児相談に訪れた母親たちの相談内容から、「こんなはずではなかった」という声が共通して聞こえるという¹⁾。子育てをしている母親の子育て観や育児信念が育児不安や育児ストレスにどのような影響を及ぼしているのかを検討することは研究課題とされている^{2),3)}。養育者の子育て観をアセスメントし、現実的な子育て観を持つように適切な情報を提供したり、サポート体制と個人の子育て観が近づくように調整したりする看護援助は、育児ストレスの予防または軽減につながると考える。しかし、子育て観をアセスメントするための信頼性・妥当性の備えた測定用具は見あたらない。

0 から 3 歳の乳幼児を持つ無職の母親の子育て観尺度が開発されている⁴⁾ が、それは養育者自身の実際の子育てに対する感情や認知的評価を測るものであり、本研究の概念とは異なるものであった。本研究では、子育て観を「自分自身の実際の子育てに対する評価」ではなく、それに影響する子育てに対する個人の価値観や見解ととらえる。また、男女平等社会や少子化時代の子育て支援を検討するためには、専業主婦に限らず、父親や有職の母親も含めた養育者全般の子育て観尺度を開発することは重要と考える。

II. 研究目的

乳幼児を持つ親に対する「子育て観尺度」を開発し、その信頼性・妥当性を検討する。

III. 文献による構成概念の検討と尺度原案の作成

1. 方法

まず、「構成概念の明確化」、「項目候補の収集」、「項目の作成・選定・分類」を目的とした文献検討を行っ

た。医学中央雑誌により、「子育て観」、「育児観」、「子育て/育児+価値観」、「育児+信念」をキーワードとして検索を行った。検索対象期間を1999から2004年とし、「看護」にて絞込を行ったところ、92文献があった。会議録などを除き、本尺度の開発に参考とすることができると思われたのは25文献であった。その他に母性看護学の専門書や各種の全国調査を含めて文献検討を行った。それにより、子育て観の理論的位置づけとその定義、下位概念を規定した。また、関連文献および共同研究者間の討論により項目候補の収集、項目の作成・選定を行い、原案を作成した。

2. 文献による構成概念の検討と尺度原案の作成

1) 理論的位置づけ

Lazarus & Folkmanの心理的ストレス理論による⁵⁾と、ストレスであると認知されるには、価値観や自己効力感のような個人的要因と圧力や社会的支援関係のような環境的要因が先行条件として存在している。本研究では、乳幼児を持つ親が子育てに対してどう評価・対処するか、その結果、育児ストレスが生ずるかには、親自身の子育て観を含めた個人的要因と同時に、夫婦関係や社会的支援体制のような環境的要因が関係していると考ええる。

2) 構成概念の検討

「子育て観/育児観」に関連する研究^{2)~4), 6)~8)}は、それぞれの研究者によって各自の解釈があり、明確な定義がないまま多義的に捉えられている。大別すれば、子育て全般に対する価値観や信念、親役割観、育児生活への印象などの「子育て観」と、実際の自分自身の子育てに対する感情や思いといった「子育て感」がある。本研究は、前者をとり、「子育て観」を乳幼児を持つ親の子育て全般に対する見解、考え方であると定義した。

子育て観の内容、つまり、構成概念については、以下のように検討した。子育てに関連する重要要素は、親、子、育児生活およびそれに関わる周囲、の4つであると考ええる。育児ストレスの構造に関する研究^{3), 9)}を検討したところ、育児のストレス要因を大きく3つに分けて捉えることができる。それは、①育児している母親自身に生じるストレス；②対象である子どもに生じるストレス；③育児を取り巻く人・物・社会環境との間に生じるストレス、である。他に、育児生活に対するイメージと現実との乖離も育児ストレスの原因として考えられる。養育者は子育てを経験する以前、つまり、育児ストレスが生じる前からこのような4側面に対する見解や考え方を持っている。そこで、子育て観の下位概念を、「親役割観」、「子ども観」、「子育てそのものについての思い」、「周囲・社会に対する要望・期待」の4側面から捉える

こととした。子育て観は、親となること、子育てをすること、子どもの数や親と子どもの年齢などの属性、いわゆる子育てなどの経験によって変化していく可能性がある。

0から6才の乳幼児期から学童期へ変わることは、育児環境が家庭中心から学校中心へと大きく変化し、子どもを育てることの内容自体に相違が生じるため、それに対する見解や期待も異なると考える。本研究は、乳幼児を持つ親の子育て観を客観的に・多面的に把握し、育児ストレスに陥りやすい対象を予測するという観点から、0から6才の乳幼児を育てることに対する子育て観を測定するものとした。

3) 尺度原案の作成

子育て観尺度の原案は、①「親役割の追求」、②「子どもへの好意感情」、③「子育て肯定」、④「子育て否定」、⑤「周囲への期待」という5下位尺度、85項目と設定した。回答は「1. まったくそう思わない」「2. そう思わない」「3. どちらともいえない」「4. そう思う」「5. 非常にそう思う」の5段階評定法とした。

IV. 内容的妥当性と表面的妥当性の検討・修正

子育て観尺度の原案に対して内容的妥当性と表面的妥当性の検討を同時に行った。それぞれの方法と結果は以下に示す。

1. 専門家による内容的妥当性の検討・修正

1) 研究方法

作成した子育て観の構成概念を提示し、その内容の妥当性と尺度全体および下位尺度が構成概念を表しているか、各質問項目がどの下位尺度に属するか、あるいは属しないか等について評価した。母子看護学研究者4名、保健師と保育士各1名の専門家から評価を受けた。各専門家には依頼文書と評価用紙を郵送か手渡しにより依頼し、回収した。

2) 内容的妥当性の検討・修正

6名の専門家から定義の明瞭化、下位尺度の整理、類似項目の修正・削除および評定法の検討が必要であるという意見が得られた。

検討・修正した結果、「子育て観」の定義を、乳幼児を育てること全般に対する個人の見解、考え方、価値観、認識、印象、期待の総体であることと整理した。また、以下のような4下位概念から構成する。①「親役割観」：親としてのあり方、態度、姿勢、役割期待に対する認識、②「子ども観」：子どもに対するイメージ、とらえ方、認識、③「子育て像」：子育てをすることに対するイメージ・認識、④「周囲との関わり」：子育てを取り巻く家族や社会にどう関わってほしいかあるいはどう関わりた

いか、という関係性。

各質問項目の子育て観の概念に対する適切性については、全員から支持が得られたのが72項目、支持率が83%（6名中5名支持）の項目が12項目、支持率が67%（6名中4名支持）の項目が1項目であった。全員からの支持が得られなかった13項目について、その内容を本尺度の概念に対する適切性を検討した。

さらに、各質問項目の下位尺度に対する専門家間の一致率が83%以上（5名以上）の項目は、61項目であった。しかし、これらにおいても、意味合いが重複または類似しているもの、項目の意味内容から回答の偏りが予測されるものも含まれたため、全項目を再検討した。

2. 表面的妥当性の検討

1) 研究方法

研究協力の同意が得られた0から6歳の乳幼児を持つ5組の父親と母親（10名）と内容的妥当性の評価者6名も含め、合わせて計16名から評価を受けた。

2) 表面的妥当性の検討・修正

表現の明瞭性、回答しやすさ等について、評価者から85項目のうち、76項目に81%以上（16名中13名）の支持があった。支持率の低い9項目と、81%以上の支持が得られたが指摘された点が重要であると判断したものについては、より明瞭になるように表現を修正した。

以上、内容的妥当性と表面的妥当性の検討・修正により、原案の85項目から23項目を削除、3項目を追加した。子育て観尺度試作版は、4下位概念に相当する4下位尺度、65項目の構成となり、「1. ほとんどそう思わない」、「2. ややそう思わない」、「3. ややそう思う」、「4. とてもそう思う」の4段階評定法となった。この65項目の試作版について、共同研究者の間で内容的妥当性と表面的妥当性の検討を繰り返し、再度確認した。

V. 質問紙調査による信頼性と妥当性の検討

この試作版を用い内的整合性による信頼性と構成概念妥当性の検討を目的とし、質問紙調査を実施した。

1. 研究方法

1) 対象者

対象者の基準を、既婚、単胎、正期産であり、母子とも妊娠出産において特に異常がなく、産後入院中の褥婦とその夫とする。初経産、分娩様式は問わない。

2) データ収集内容と方法

データの収集内容は、子育て観尺度試作版と、基礎的情報から構成した。

データ収集方法は、留め置き調査法である。産後入院中に、基準を満たす対象候補者である褥婦にアンケート

の趣旨や協力の内容等を記載した文書にて説明し、依頼する。その夫には、褥婦を通して依頼する。夫婦それぞれの回答は、退院までに病棟に設置している回収箱に自記記入後厳封の上、投函するよう依頼する。データ収集施設は、出産数の多い首都圏の2つの病院である。

調査期間は、2004年12月から2005年1月。

3) 倫理的配慮

対象者の基準を満たす褥婦に対し、研究の趣旨、プライバシーの保護、自由参加・途中辞退・匿名性の権利、研究参加方法等について文書を用いながら口頭で説明し研究依頼を行う。質問紙の返送をもって承諾が得られたこととする。なお、千葉大学看護学部倫理審査委員会の承認を受けた上で実施した。

4) 分析方法

統計解析ソフトSPSS12.0J for Windowsを用い、統計学的分析を行う。項目反応分布と項目－全体関連の検討、内的整合性による信頼性、因子分析による構成概念妥当性の検討を行った。

2. 結果

1) 対象者

調査対象は、基準を満たした出産後の夫婦700組であり、回収数は492名（母親296名、父親196名）、回収率は35.2%であった。子育て観尺度の全項目に対してすべての回答が得られた416名（母親252名、父親164名）を分析対象とした。対象者の概要は表1に示す。

表1. 対象者の概要

年齢 (n = 416)	32.1 ± 5.2 (18-55)
子どもの数 (n = 416)	1.7 ± 0.9 (1-9)
第1子年齢 (n = 416)	2.2 ± 3.1 (0-21)
自分自身の兄弟数 (n = 416)	1.8 ± 1.1 (0-6)
初経別	
初産	189 (45.50%)
経産	226 (54.50%)
合計	415 (100.00%)
乳幼児の世話経験	
人のしたところを見たこともない	21 (5.10%)
人のしたところを見たことがある	75 (18.20%)
あやしたり抱いたりしたことある	137 (33.30%)
実際に世話をしたことある	179 (43.40%)
合計	412 (100.00%)
育児の相談相手	
いる	383 (93.00%)
いない	29 (7.00%)
合計	412 (100.00%)

2) 項目分析による質問項目の選定

65項目尺度全体のクロンバック α 係数は0.793であった。65項目が一つずつ除かれた場合のクロンバック α 係数は0.786～0.803であった。そのうち尺度全体の α 係数より大きく、全体の内的整合性を脅かす可能性の高い項

目、および単純集計・クロス集計の結果、平均値や標準偏差に大きな偏りの見られた項目、I-T（項目－全体）相関.20未満の項目から5項目を削除した。残りの60項目に対し、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。初期の固有値等を基準にして、5つの因子が抽出された。因子負荷量が0.30未満の14項目と、項目内容から因子との関連が解釈困難であった3項目の、合計17項目を削除し、最終的に43項目を採用した。

3) 信頼性・妥当性の検討

43項目からなる子育て観尺度の総得点は98点から166点の範囲にあり、平均131.8点（SD9.8）であった。Kolmogorov-Smirnovの正規性検定の結果、総得点は正規分布であることを示した（ $Z=1.236$, $p=0.094$ ）。

尺度の構成概念妥当性を求めるために、43項目により再構成した尺度に対し、再度、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行い、初期の固有値等を基準に5因子が抽出された。各下位尺度を構成する質問項目は同一因子に0.30以上で最も高い因子負荷量を示したものが含まれており、尺度は構成概念妥当性を確保していることが示された。この5因子を、「子育ての肯定的印象」、「親役割強化」、「子育ての否定的印象」、「周囲との関わり」、「子ども観」と命名し、5下位尺度とした（表2）。

子育て観尺度最終版のクロンバック α 係数は0.79であった。各下位尺度の α 係数は0.58～0.81であり、内的整合性が一定のレベルに達していることが確認された。

本尺度は、下位尺度得点によってどのような子育て観を持つかを評価するものとする。「子育ての肯定的印象」は、得点が高いほど、子育てに対して価値のあるものや自信をもたせてくれるものなどすることとなる。「親役割強化」は、得点が高いほど、親として子ども中心にしないといけないうことや他の役割と比べ親としての役割を最優先にすべきと考えることとなる。「子育ての否定的印象」は、得点が高いほど、子育てに対して心理的ストレスや身体的疲労および社会的疎外感、経済的負担をもたらすものなどすることとなる。「周囲との関わり」は、得点が高いほど、子育て中の周りの人たちとの関わりを役立つものとして重要視することとなる。「子ども観」は、得点が高いほど、子どもを家の跡継ぎや老後を見てくれる人と期待し、また親の思うとおりになるものとするなどすることとなる。

VI. 考 察

1. データの適切性

開発した「子育て観尺度」の総得点は正規分布であった。これは、総得点が平均値を中心に低得点から高得点

の全範囲にわたっており、本研究のデータが信頼性・妥当性の検証に用いることのできる、偏りのない適切なデータであることを表している。

2. 子育て観尺度の信頼性・妥当性

1) 信頼性（内的整合性）

本研究の子育て観尺度のクロンバック α 係数は、全体が0.79であり、5下位尺度の α 係数は0.58～0.81であった。測定用具が信頼性を確保しているかどうかを判断するには絶対的な基準は存在しない。「グループレベルの比較を行おうとするだけならば、信頼性係数が0.70あればよく、おそらく0.60でも十分だろう」¹⁰⁾とされている。下位尺度「子ども観」だけは低かったが、尺度全体と他の下位尺度は、十分な内的整合性が確認された。下位尺度の α 係数が低い原因は、項目数が少ないことが考えられる。一般的には、 α 係数を高めるには、相関の高い項目を選ぶか、項目数を増やす、の2通りの方法がある¹¹⁾。今後、「子ども観」下位尺度について相関の高い項目を追加し、信頼性を高める必要があると考える。

2) 妥当性

(1) 内容的妥当性と表面的妥当性

「子育て観尺度」の開発過程においては、関連文献の検討に基づき質問項目を作成するとともに、6名の専門家と乳幼児の親（父親と母親）10名から他者評価を受け、内容的妥当性の確保に努めた。また、項目分析により適切な質問項目を選択した。これにより、「子育て観尺度」の内容的妥当性が確保されたと考える。

(2) 構成概念妥当性

文献検討により規定した子育て観の構成概念においては、下位概念を4側面から捉えることとしたが、原案の段階では下位尺度を5つと設定した。4下位概念のうちの「子育てそのものについての思い」の内容を問うために必要と考えた項目は多数あり、肯定的なものと否定的なものが明確に分かれたため、「子育て肯定」と「子育て否定」の2下位尺度と設定した。専門家評価から、4下位概念と5下位尺度の整合性が不明瞭であるという意見があり、この段階では「子育て像」という下位尺度にまとめた。しかし、因子分析を行った結果、5因子が抽出された。そのうちの第1因子は「親としての役割を果たすことにより人間的に成長できる」、「子どもは夫婦のきずなを深めてくれるものである」などに対して負荷量が高かったため、【子育ての肯定的印象】とした。また、第3因子は、「子育てはイライラすることである」、「子どもの相手をするのは疲労がたまるとある」などに対して負荷量が高かったため、【子育ての否定的印象】とした。すなわち、子育て観の下位概念の「子育てをすることに

表2. 子育て観尺度の因子構造（主因子法 プロマックス回転法）（n = 416）

下位尺度	質問項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
子育て肯定的印象 9項目 $\alpha = 0.809$	61) 親としての役割を果たすことにより人間的に成長できる	0.83	0.00	0.00	-0.11	0.10
	63) 親としての役割を果たすことは自分にとって価値があることである	0.82	0.02	0.04	-0.08	-0.04
	43) 親にとって子育てをすることは非常に価値がある	0.75	-0.05	0.01	-0.01	0.02
	30) 子育てをすることは人間としての成長につながる	0.69	-0.01	0.07	-0.09	0.00
	1) 子育てをすることによって自分自身に自信が持てる	0.48	0.01	-0.09	-0.05	0.14
	62) 子どもの世話をすることで子どもの成長を感じることができる	0.43	0.13	-0.05	0.13	-0.21
	51) 子どもは夫婦のきずなを深めてくれるものである	0.42	0.09	-0.04	0.21	0.06
	42) 子育ての経験は仕事などの役に立つ	0.41	-0.21	-0.03	0.17	0.12
	22) 子育てを協力し合うことによって家族の絆が深まる	0.39	0.06	0.05	0.25	0.00
親役割強化 10項目 $\alpha = 0.717$	23) 親は子ども中心の生活をするべきである	-0.05	0.66	0.18	0.02	0.04
	7) 親は子どものためなら自分のことをさげしにしてもやるものだ	-0.07	0.62	0.02	-0.07	0.10
	20) 親とは子どもに対して無償の愛を与えるものだ	0.07	0.59	0.03	0.07	0.03
	33) 親とは子どもに対していつも愛情を抱いているものだ	0.02	0.59	-0.04	0.06	-0.01
	5) 親としての役割を最優先に果たすべきである	-0.01	0.58	0.01	-0.08	-0.09
	12) 子どもがよく育つも悪く育つもすべて親の努力にかかっている	-0.04	0.54	0.04	0.07	0.12
	39) 親は子育てに責任がある	0.24	0.42	0.09	-0.03	-0.16
	4) 親は子どもの世話をすべきである	0.00	0.39	-0.03	-0.04	0.03
	48) 子どもが3歳になるまでは、母親は子育てに専念すべきだ	-0.02	0.38	-0.04	-0.06	0.13
子育て否定的印象 10項目 $\alpha = 0.789$	53) 子育てはイライラすることである	0.05	0.02	0.69	-0.06	-0.12
	16) 子どもの相手をするのは疲労がたまる	-0.18	0.15	0.62	0.08	-0.02
	27) 子育ては孤独を感じるものである	0.11	-0.03	0.57	-0.12	0.08
	37) 子育て中は社会や周囲から疎外される	0.07	-0.02	0.56	-0.07	0.11
	41) 子育ては毎日同じ事の繰り返しであるものである	-0.03	-0.01	0.56	-0.05	0.15
	34) 子どもを連れて外出するのは大変なことである	-0.08	0.09	0.54	0.10	-0.19
	55) 子育てをすると自分のやりたいことができない	0.00	0.06	0.52	-0.04	-0.05
	2) 子育ては苦労ばかりである	0.00	0.08	0.50	-0.14	0.17
	28) できるだけ一時預かりなどの保育サービスを利用したい	0.01	-0.31	0.39	0.23	0.08
周囲との関わり 10項目 $\alpha = 0.743$	40) 子育ては経済的負担が大きい	0.03	-0.01	0.37	0.08	-0.12
	50) 子育ての体験者から子育てについての体験談を聞くことは役に立つ	-0.04	-0.04	-0.09	0.71	0.09
	58) 子育ての経験がある友達から情報や助言をもらうことは役に立つ	-0.01	0.04	-0.12	0.69	0.05
	35) 人の子育ての様子を見ることはためになる	-0.04	0.00	0.09	0.53	-0.06
	15) 同じくらいの年齢の子どものいる親と交流したい	-0.08	0.12	-0.05	0.51	-0.03
	52) 配偶者以外に子育てについて安心して話せる人が必要である	0.12	-0.09	0.12	0.51	-0.14
	13) 子育てを介して付き合いが広がる	0.00	0.16	-0.14	0.44	0.00
	60) 雑誌やテレビ、本などの育児情報は参考になる	-0.03	-0.02	-0.12	0.41	0.21
	14) 育児について相談できる専門家（医師、保健師、保育士など）が必要である	0.05	-0.12	0.06	0.41	-0.14
子ども観 4項目 $\alpha = 0.575$	21) 体調不良の時などには親や兄弟姉妹等の家族に子どものことを頼みたい	0.02	-0.09	0.18	0.39	0.04
	44) 普段から身内の人たちに子育てを手伝ってもらいたい	-0.01	-0.10	0.31	0.32	0.11
	36) 子どもは家の跡継ぎである	0.04	0.07	0.14	0.07	0.61
	29) 子どもがいたら老後は安心である	0.11	0.10	0.04	0.06	0.49
	19) 子どもは親の分身である	-0.01	0.39	0.01	0.06	0.41
	8) 子どもは親の思いどおりにならない	-0.02	0.06	0.11	0.13	0.32

表3：因子間相関行列

因子	1	2	3	4	5
1	1	0.406	-0.13	0.39	-0
2		1	-0.24	0.07	0.11
3			1	0.2	0.01
4				1	-0.1

対する印象」を問うためには、内容が豊富で数多くの項目が必要とされ、かつ肯定的印象と否定的印象の2因子により説明することが妥当であることが確認できた。そこで、5つの下位尺度が適切であると考ええる。

3. 子育て観の特性と子育て観尺度の有用性

子育て観の性質から考えると、そのものに良し悪しが

ないものであり、現実にある育児環境や条件に合致すれば、つまり、現実的な子育て観を持つことになり育児ストレスがあまり生じないであろう。反対に、実際の育児環境からかけ離れた子育て観を持っていれば、育児ストレスが増加しやすく、ひいては育児放棄や虐待に発展する可能性もあろう。また、本尺度は、下位尺度得点によってどのような子育て観を持つかを評価するものとする。各下位尺度の得点が乳幼児を持つ親の標準範囲をこえて高すぎまたは低すぎた場合は、非現実的な子育て観を持っている可能性が大きいと推測する。つまり、親役割や子どもおよび育児生活や周囲との関わりに対して通常以上に価値をおき期待しすぎると、現実とギャップが生じやすく、育児不安になる可能性が大きい。一方、親役割や子どもおよび育児生活や周囲との関わりに対して極端に価値をおかず期待もしなければ、育児放棄の傾向があることも考えられる。

本尺度は、養育者の夫婦関係や社会支援体制を評価すると共に、子育て観を客観的にアセスメントすることによって、育児ストレスに陥りやすい対象をスクリーニングすることを可能にすると考える。それによって、養育者がより現実的な子育て観を持つように情報提供したり、養育者の子育て観と育児環境がより近づくように周囲からのサポート体制を調整したりする子育て支援が可能となると考える。本研究の対象者は、経産婦という実際に子育てを経験した対象も含まれているが、第1子出産入院中という初産婦は、ほとんど実際の子育てを経験していない対象者として考えられる。したがって、本研究の「子育て観尺度」は、妊娠期の男女にも用いることができ、子育てを経験する前のスクリーニングツールとして活用することが可能であると考えられる。

VII. 結論と今後の課題

本研究は、「子育て観」の定義を、乳幼児を育てること全般に対する個人の見解、考え方、価値観、認識、印象、期待の総体であるとした。開発した子育て観尺度は、43項目5下位尺度で構成された。下位尺度は、【子育ての肯定的印象】、【親役割強化】、【子育ての否定的印象】、【周囲との関わり】、【子ども観】の5つとなった。内的整合性による信頼性については、【子ども観】という下

位尺度を除き、尺度全体と他の下位尺度は内的整合性を確保している。また、専門家と乳幼児の親による他者評価と因子分析の結果、内容的妥当性と構成概念妥当性が確保されていることが確認できた。

今後は、下位尺度の1つである【子ども観】の信頼性を高めることが課題である。また、「子育て観尺度」の信頼性を高めた上で、調査を重ねていくことによって、その文化における各下位尺度得点の標準範囲が明らかになることが重要であり、尺度のスクリーニング機能の検討を今後の課題とする。

(本研究は、千葉大学21世紀COEプログラムによる研究である。)

引用文献

- 1) 大日向雅美：育児不安－発達心理学の立場から、こころの科学, No.103, 10－15, 2002.
- 2) 八重樫牧子, 奥山清子, 林基子, 本保恭子, 小河孝則：母親の就労が女子大生の就労観や子育て観に与える影響について, 川崎医療福祉学会誌, 11(2), 245－253, 2001.
- 3) 清水嘉子：母親の育児に対する信念と育児ストレスの関係, 小児保健研究, 62(5), 558－568, 2003.
- 4) 内藤直子：0－3歳の乳幼児を持つ（専業母親）の子育て観尺度開発に関する研究－CPS-M97の妥当性・信頼性の検証－, 日本看護科学学会誌, 18(3), 1－9, 1998.
- 5) リチャード・S・ラザルス, スーザン・フォルクマン著, 本明寛, 春木豊, 織田正美監訳：ストレスの心理学－認知的評価と対処の研究, 実務教育出版, 25－230, 1991.
- 6) 百瀬栄美子：母親の就業状態による子育て観の構造, チャイルドヘルス, 6(10), 772－776, 2003.
- 7) 中村知美, 豊沢亜紀, 片山理恵, 白井瑞子, 内藤直子：0～3歳の子どもを持つ看護婦として働く母親の子育て観に関する研究, 香川母性衛生学会誌, 1(1), 32－39, 2001.
- 8) 光田咲子, 村上明美：はじめて子どもを持つ父親の育児観, 母性衛生, 43(1), 67, 72, 2002.
- 9) 奈良間美保等他：日本語版Parenting Stress Index (PSI) の信頼性・妥当性の検討, 小児保健研究, 58(5), 610－616, 1999.
- 10) D.F.ボーリット, B.P.ハングレー, 監訳近藤潤子：看護研究 原理と方法, 医学書院, 246, 1999.
- 11) 堀洋道監修, 吉田富二雄編：心理測定尺度集Ⅱ－人間と社会のつながりを捉える＜対人関係・価値観＞, サイエンス社, 447, 2003.

DEVELOPMENT OF A CHILDREARING VALUE SCALE FOR PARENTS : RELIABILITY AND VALIDITY

Dong Chen*, Emi Mori*, Yoshimi Mochizuki^{*2}, Eiko Kashiwabara*, Mika Ando^{*3}, Eiko Otsuki*

* : School of Nursing, Chiba University, ^{*2} : Faculty of Nursing and Medical care, Keio University,

^{*3} : EX- School of Nursing, Chiba University

KEY WORDS :

parents, childrearing value scale, development

This paper describes the development, reliability, and validity of a Childrearing Values Scale (CVS) for measuring parents' childrearing values. Following a literature review, a conceptual framework was developed. The childrearing values framework was constructed based on the following four dimensions: beliefs about parental roles, beliefs about children, feelings about childrearing, and relationships with people in the parents' environment. An original 85-items questionnaire was developed and is scored on a 5-point Likert scale.

The content validity and face validity of the questionnaires were established by five parental nursing experts, a childcare specialist, and 5 couples with babies and young children aged 6 years or younger. The trial version of the CVS consisted of 65 items scored on a 4-point Likert scale. The trial questionnaire was distributed to 700 couples after the birth of a healthy child. A total of 492 questionnaires were returned and the responses of 416 individuals (252 mothers and 164 fathers) were statistically analyzed. This protocol of this survey was approved by the institutional review board of the School of Nursing, Chiba University.

Based on the results of item-analysis, 43 items were selected. Using factor analysis, 5 factors were extracted and the cumulative contribution after factor extraction was 40.62%, which suggests acceptable construct validity for the CVS. The 5 factors, considered to be 5 subscales were "positive impression of child care," "awareness of parental role," "negative impression of child care", "relationships with people in the parents' environmen", and "child belief". The Cronbach's coefficient α for the scale was 0.79, and ranged from 0.58 to 0.81 for each of the five subscales, indicating acceptable levels of internal consistency. Using a 43-item questionnaire, the CVS obtained an acceptable level of reliability and validity. However, further refinement of the scale is indicated..